

宮工親文

縛り地蔵とは？



▲年に一度の縄の縛り直しの様子

広瀬川付近に体を縄で縛られた地蔵がある。縛り地蔵の事を知らない人から見てみれば、見た目は不気味だし、顔は見えないので怖いだけであろう。

この地蔵は藩制時代、仙台藩内の主導権争い「伊達騒動」に絡んで斬首された武士、伊東七十郎の供養のために作られた。

伊達騒動の際に伊達兵部を切るうとして捕らえられた伊東七十郎重孝は、寛文八年四月二十八日米ヶ袋の刑場で斬罪に処せられたが、片平丁の牢を出ッ切りになるとき揚り屋の床板をどうしようと、踏み鳴らした気力は三十三日間断食した人とは思えなかったというほど元気だったという。鹿子清水の坂から捕縄をとって

た獄卒を横倒しに引きずったまま駆け出して刑場に向かい、土壇場に坐ってから首斬役の小人萬右衛門に「人は首をはねられると前にのめるが、俺は仰向けになるだろう。さすれば兵部殿を三年のうちに亡きものとして見せよう。」といい、萬右衛門が切り損ずると後ろを振り向いて、落ちついてよく切れといい、果して後ろに倒れた。萬右衛門はその翌日、小人頭をやめて、七十郎の供養に建てたのが、鹿子清水の河原にある縛り地蔵尊だといひ伝えられている。

この地蔵は人間の苦しみなら何でも除いてやるというわれ、願かけに縄でしぼるため地蔵さんの顔も體も縄でぐるぐる巻きにされて、

実際に行ってみて

学校の近くに縛り地蔵があるとは知らなかった。お祭りに行ってみて、縛り地蔵を縛っている縄を触らせていただいた。実際地蔵に縄を巻かせていただいたりもした。縛り地蔵に縄を縛りながらお願いをするという願いが叶うという話を、米ヶ袋町内会の竹内廣さんが教えてくださった。現在、縛り地蔵のお世話は米ヶ袋町内会で行っているそうだ。

その後、部員皆で各自願いを込めてお参りをした。後で部員の声を聞くと、願いが叶っている人が続出。確実にご利益がありそうだ。今回の研修ではめったに体験出来ないことをさせてい



▲竹内廣さんの話を聞く新聞部員

ただき良い経験ができたと思う。

(インタリア科二年 奥山 ちさと)

今回、初めて町内会の行事に参加してみた。県工の周りを歩いてみたことが無くてこんな風になっているんだなと実感した。また「縛り地蔵」という名前は知っていたが、実際に見たことはなく、どんなものかと思っていた。行って見たら小学生くらいの大きさの地蔵が縄でぐるぐる巻きにまかれていた。正直お話を聞く前までは不気味だし怖いと思っていた。ただ、お話を聞いた後、なぜ地蔵が

立てられたのかわかってから昔の人がどれだけ伊東七十郎を尊敬していたのかわかった。また、町内会の行事という事で地域の方と関わった。今まで話したことがなく、どんな方たちなのだろうとドキドキしていたが、実際話してみるととても面白い方たちが多かった。また機会があればお話を伺いたい。

(インタリア科二年 高橋桃子)

編集後記

竹内廣さんについて



▲本校を応援してくれる看板

今回、縛り地蔵や町内会についてお話を伺った米ヶ袋町内会県工応援団会長の竹内廣さんは県工をよく応援してくださっている。高総体でサッカー部が競技している時に我々の向かいの応援席で応援してくれていた、自宅の窓に写真のような看板があったりと大変お世話になっている。お会いした際には、元気に挨拶をしてほしい。また、これからもお世話になると思うので私たちが町内会のお役に立つような手伝いをしようと思った。

(インタリア科二年 高橋桃子)

発行日

H30・9・30

宮城県工業高等学校

新聞部

伊東七十郎について

寛永十年七月、伊東重村の子として仙台に生まれた。幼いころの名は鶴千代とい、十八歳に名前を七十郎に改めた。幼いときは従順であったが、十六歳の時から性格が一変し、意志が強く容易に屈しない気性をあらわすようになった。成長するにつれて、益々天性を發揮し、武士の典型として世人のあこがれとなり慕われるような大人物となった。結髪をしてからは、婦人の手から物を取らず、飽食せず、寝るにも帯を解かないでいた。夏も蚊帳を使用せず、ただ手で顔を蓋うのみだった。義を進んで堅く守り、早起きして善いことをするのを楽しみとした勇猛だったが、生物を傷つけたことがなく、真正面で利学校の近くに縛り地蔵があるとは知らなかった。お祭りに行ってみて、縛り地蔵を縛っている縄を触らせていただいた。実際地蔵に縄を巻かせていただいたりもした。縛り地蔵に縄を縛りながらお願いをするという願いが叶うという話を、米ヶ袋町内会の竹内廣さんが教えてくださった。現在、縛り地蔵のお世話は米ヶ袋町内会で行っているそうだ。

その後、部員皆で各自願いを込めてお参りをした。後で部員の声を聞くと、願いが叶っている人が続出。確実にご利益がありそうだ。今回の研修ではめったに体験出来ないことをさせてい

を求めることがなかった。読書にはげみ、武道を磨いて修養を怠らず、書が下手なのを恥じて屋外に出ないで三年後、師の筆遣いに到達したという。

弓術、馬を扱う、剣、槍を好み又力量もあった。馬に跨り北上川を乗り切り、また引き返したという。江戸で、天狗といわれていた劍客渡辺九郎左衛門と名勝負をしたあと九郎左衛門に弟子入りして更に剣を極めた。武芸の達人として、諸侯旗下の来訪して武道を問うほど江戸でも有名だった。気力甚だ盛んで、堅忍不拔の精神に燃えていた。儒学を内藤閑齋に学んだ。

(インタリア科二年 高橋 桃子)